

松永延造全集

第三卷

国書刊行会版

松永延造全集第三卷奥付 昭和五拾九年九月
廿日印刷 昭和五拾九年九月卅日初版發行

監修者草野心平 編者伊藤信吉／辻淳／吉村
りゑ 發行者佐藤今朝夫 發行所國書刊行會

東京都豐島區巢鴨三丁目五番地拾八號／電話
東京九一七の八二八七／振替東京五の六五二

○九 組版明和印刷株式會社 印刷セイユウ

寫眞印刷株式會社 製本河上製本株式會社

定價六千八百圓 落丁亂丁はお取替致します

目次

詩

花の詩

大きいものと小さいもの

曉の夢

二人は必ず相逢はう

妖女庭に舞ふ

雪の夕べに

喜悅少なき我への自訓

希望

默想曲

私の思ひを天に結ばしめよ

嵐の時に

病みて立ち得ぬ友へ

今宵は此處にとどまれ

寶瓶宮に雲雀は舞はさう

夜の思ひ

貴方は喜びの日のみを思ひ出す

わづらひを知る時

今も忘れずにあるか

マンダラ

鈴蟲

望み

仕合せな花

月の出の頃に

見えぬ所に起る美しいもの

半月の女性のたはむれ

月と子供

しのゝめを呼ぶ

冬の夜更

あやふさの中の安けさ

熟せる秋

夏の夜なるぞ

樹上の吹笛者へ

戯曲

時頼と横笛

太子の晝と夜

評論／随筆／雑篇

感想

覚え書き

古文異譯

諸名士の雜誌新年號觀

私の一日

古典的短話

小感一束

感想

手帳より

實用と假構

最近の覚え書き

五大雜誌とその編輯者

偶感

私の此頃の生活

予は何新聞を愛讀するか及びその理由

雜感

「アリア人の孤獨」一篇

我が手帳

年頭感

一、私の餘技 二、娛樂に就ての趣味

善なる民衆

急ぐ蛾

大正十五年間に現れたる作品のうち最も記憶に残れるもの

谷崎潤一郎作「ドリス」

好意ある忠言を

良心の個人差

現時活躍せる論客に對する一人一評論

文壇惡の改良法——理想郷物語

長篇に着手

耐忍と努力

本年（昭和三年）の計畫・希望など

自由の氣風を願ふ

時評風の感想

昔の言葉

作家の行動——とその個人的利害

附隨的な不用物

勞働者の心性調査

春陽堂版『職工と微笑』序文

文壇改革の希望

何處の國も同じ

推奨する新人

私の一日

批評の方法

本年度初期の諸家推薦作

二月雜誌月評

今年發表した一ばん好きな自作について

海棠

31年の清算

32年と33年

田舎ぐらし

夢に於ける願望と憂慮との實現『心理研究』論文

解説／伊藤信吉

解題／年譜（辻 淳）／參考資料（吉村りゑ）

松永延造全集

第三卷

詩

花の詩

昭和十年十月三日

出生の地、横濱を追はれ、見も知らぬ金澤は泥龜^{でいも}の里に隠棲してから、既に半歳を経た。

今日は母が細君をつれて、夜光寺へ稚兒を見に参つたが、後に、夜光寺は藥王寺の誤りと分る。歸りの土産は野生の草花だけである。私が苦痛な時間を忘れ去る爲めに、何時も狂氣の如く花を愛する事を皆のものがよく知つてゐるからであらう。

さて花束の中には、藤袴のやうな絹絲の房めいた花が七つ混つてゐる。細君は初め之を藤袴とのみ信じて摘むで來たのであるが、もしさうしたら、花色が薄紫でなくてはなるまい。尖端は白き光りを生じ、下るに従つて淡黄色に移り變つてゐる所を見れば、何うしても、ひよどり花であると思ふ。

次のものは細君の云ひ當てた通り、水引草で、花蕾の上面が眞紅。下面が白であるために、水引と云ふ名も出て來たのであらう。

最後にもう一つ、姫紫蘇にそっくりで、ただ花色だけの異つた唇形科の草が入り混つてゐる。之は大かうじゆと呼ばれて、此處らあたりの野原に多く自生してゐるものである。

不意に勞れがひどくて、この先を書きつづれぬ。無理に押し続けると、右眼の痛みが餘計つにつて困る。

尙ほ我慢すると口を大きく開かねば居られなくなる。心臓のときめきを鎮めようと、もう一度野の花へ眼を移したが、その時決して休まうとして呉れない思惟の力は更に一つの詩を創出して、不思議にも怪しい地獄めいたものを私に経験せしめた。

針の褥に轉^まびねて

悟りの道もなきがごと

花に安さを求めては

幾春秋か過しけむ。

プルの青は解け初めて

あした霜置くミオソテス、

宵の雨降るをだまきは

灯^ひをかがげ見る藍の色。

こぞのアリアム灰白く

うさもつらさもわきまへし

心の如く澄み切りて

月沈む邊に消えにしを。

ことし咲きしはほのぐらき

うき世の風を驚かぬ

ひよどり花の七つばさ。

以上の詩、古い調を採用したのは、成る可く口で歌へるやうにと念じたからである。又尖端的な新しい詩人に月竝の感を起させる箇所があらば、それは自分が詩の「普遍的妥當性」に就いて思ふ事が久しいためである。自分の年は昭和十年に四十一歳、はげしい主觀にのみよつて、又はインスピレーションにのみよつて作詩することを、無理にも差し控へる年齢に達してゐるからである。

大きいものと小さいもの

私は庭に立つてゐる、

幼い友よ

貴方の小さい窓を開けて

光りの方へ顔をお出し、

何か話してと貴方は云ふか？

話は澤山あるけれど

今日は蝶と蛾の事にしよう。

ゴマフ蛾の翅へ天が印した

光と影との様な斑點は

樹の枝に眠る豹のそれと

ほんたうによく似通うてゐる、

孔雀蝶の翅に天の印した

四つのきらびやかな蛇の目紋は

孔雀の尾先のそれに似てゐる。

小さく細やかなために

一層愛らしい之等天使の友等を

貴方は何う眺めやるか？